

十文字学園女子大学人間生活学部紀要第5巻 2007年

幼稚園における保育方法と保育者による 発達評価の関連(3)

A Study on the Relationship between Teaching Methods and the Teachers' Evaluation of Child Development in Preschools (3)

関口はつ江
Hatsue SEKIGUCHI

長田 瑞恵
Mizue NAGATA

野口 隆子
Takako NOGUCHI

要 約

本研究は2005年、2006年の報告に続いて、幼稚園児の保育者による発達評価結果を保育の園タイプ別に縦断的に検討した結果の報告である。各時期における達成率の変化傾向が園タイプによって異なることが明らかになり、これまでの横断的比較においてはいずれの時期においてもAタイプ(課題型)が高い傾向が見られたのに対し、今回は3歳児や4歳初期に達成率が低かったCタイプ(自由型)において、5歳時期末では3領域において他の2タイプより高い達成率を示した。また、各園タイプの達成率の上位、中位、下位群の変化傾向も異なり、園の保育方法によって、子どもの育つ側面、速度等が異なることが示唆された。今後さらに個人的な発達の経過等を検討し、保育のあり方と子どもの育ちとの関連を明らかにすることが課題である。

Summary

This study is a following report of year of 2005 and 2006, and is the result of a longitudinal analysis which was done by each different type of preschools based on an evaluation of preschool children's development by preschool teachers. It was made clear that tendencies of changes of achievement rate in an each stage are different by the type of preschools.

十文字学園女子大学人間生活学部幼児教育学科

Department of Early Childhood Care and Education, Faculty of Human Life, Jumonji University

キーワード：発達評価 縦断的結果の比較 保育方法 変化傾向

Key words: Evaluation of development, Comparison of the longitudinal result, Teaching methods, Tendency of changes

In a previous lateral comparison, it was seen that type A (Assignment type) had a high achievement tendency. However in this study, a higher achievement rate was recorded than the other 2 types in 3 areas at the end of the 5 years stage in type C (Free play type) in which the achievement rate was low in 3 year old children and the beginning of 4 years old. Also tendencies of changes vary by group of upper, middle and lower achievement rates of each preschool type. It was shown that the side and speed of children's development differ by the teaching methods of preschools. In the future, it would be an interesting area of future research that making clear the relationship between ways of teaching and children's development by analyzing personal developing progress.

問 題

これまで保育方法の異なる園（3つの園タイプ）を対象に、幼稚園教諭に幼児の発達評価を行っていただき、その結果の年齢別発達領域別の横断的結果の報告（関口・長田・野口2005）、および同一年度内の縦断的評価の変動についての報告（関口・長田・野口2006）を行ってきた。それらを通して次のようなことが捉えられた。1 同一年齢の幼児に対する達成率の評価でも園タイプによって評価傾向が異なり、概して課題型園において高い評価がなされ、自由活動型園において低い評価がなされる傾向がみられる。2 さらに年齢が低い時期ではその傾向が著しく、5歳児になるとその差はかなり解消される。3 集団内の相対的発達率の位置の変動、言い換えるとそれぞれの時期における発達速度の個人差が保育方法によって異なり、課題型の園では3歳児期での集団内変動は少なく、5歳児において大きい、すなわち5歳児において発達速度の個人差がでる。それに対して自由型園では3歳時期で変動が大きく、5歳児期の変動は少なく、発達のペースが一様であることが伺われた。

その原因については、園のカリキュラム、指導方法等の保育実践の実体の違いに帰する要因と評価者である担任の評価基準や認知構造など評価の方法に帰する要因、その他の社会的要因、例えば保護者の家庭環境、幼稚園以外での幼児の生活経験等とが考えられる。その一部については評価項目間の因子分析によって、保育方法によって評価視点の違いがあることが示唆された（関口・長田・野口2006）。この問題は指導計画等との関連でさらに追究されなければならないが、その前に幼稚園の2年、3年の生活の中での発達の過程、道のりとして縦断的に一人一人の幼児の育ち方をとらえことが重要であると考え。本研究2年目終了時点で明らかになったことを園タイプとの関連で報告する。

これまで明らかにされてきた保育方法による評価結果の園タイプによる差異の傾向について、個々の幼児の育ちの過程としてみた時に同様の傾向があるかどうかを検証しようとするものである。今回の報告は縦断的評価結果を園タイプ別に量的に捉え一般的傾向を明らかにしたものである。

研究方法

調査方法 先に報告してきた関東、東北、北海道の私立幼稚園9園の園児について担任教師に、幼児の発達状態を6領域128項目について5段階尺度によって記入して頂いた。2005年度までと同様の方法による調査を2006年3月調査結果に行った。結果の分析に用いた資料は第1回2004年6月、第2回2005年6月、第3回2006年3月のものである。

研究対象者 今回の研究対象者は2つのグループに分けられる。一群は第1回(2004年6月)に年中組であった対象で第3回は卒園時の評価である。これを「99年誕生群」とするもう一群は第1回(2004年6月)に年少組(入園当初)で、第3回は年中児終わりの状態であり、これを「00年誕生群」とする。

対象者の内訳は表1に示した。

なお発達調査項目、園タイプの分類は何れも関口・長田・野口(2005)によるものである。園タイプはクラス単位の一斉的活動時間の1日平均の長さ定期的にを行う課題活動(例、体育指導、水泳指導ワークブックによる文字指導)の種類数の調査結果によって、Aタイプ(課題活動型、クラス活動時間平均108分、課題数4.2種類)、Bタイプ(中間型、クラス活動時間平均82.5分、課題数1.5種類)、Cタイプ(自発活動型、クラス活動時間平均28.1分、課題数0.2種類)に分けた。また、園児のグループ分けは、第1回調査時に6領域全体の達成率の上位3分の1、中位3分の1、下位3分の1に入る子どもをそれぞれ上位群、中位群、下位群として対象群とした。

表1 対象者の内訳

	00年度誕生群	99年度誕生群
Aタイプ	131	153
Bタイプ	33	91
Cタイプ	60	142

結果と考察

1 園タイプ差の全体的傾向

各領域、対照群別に、園タイプによる達成率の3時点の縦断的变化を示したものが図1である。また時期、領域、年齢、園タイプの分散分析を行った結果を表2に示した。さらに領域毎に被験者間の時期、年齢、園タイプの分散分析を行ったものが表3である。グラフにおいて99年誕生群06/03結果と00誕生群05/03結果は同一年齢時期(年中組末)である。

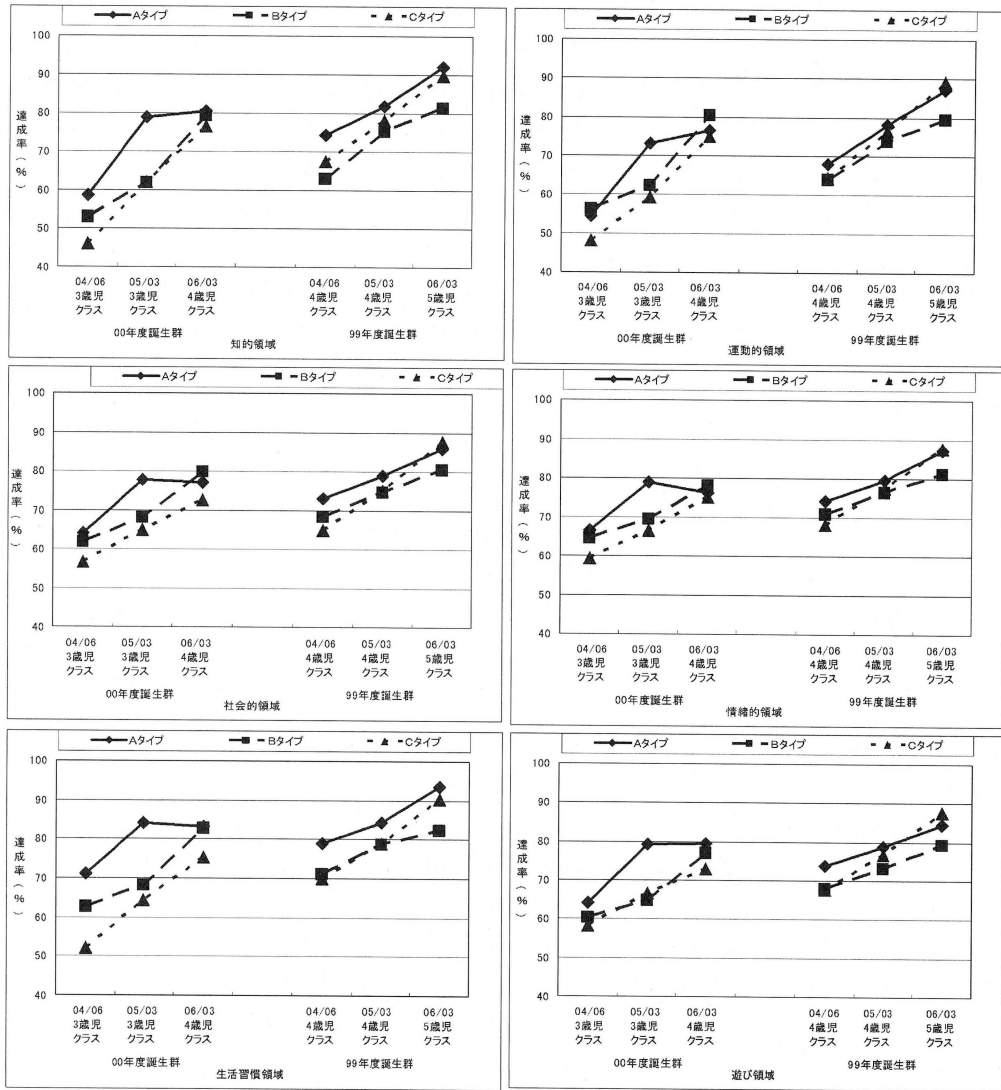


図1 各領域、対象群別に園タイプによる達成率の3時点の縦断的变化

園タイプについてみると表3及び図1からも読みとれるように、全般的には全領域についてAタイプにおいて評価が高く、Bタイプにおいて低い傾向がある。これを各時期別に差の有意性の検討をしたものが表4及び表5である。3歳時期、4歳時期は一貫してAタイプの評価が高い。特に3歳3月期はAタイプは全領域にわたって他の2タイプ園と全く異なる高さの評価が見られるのが特徴的である。4歳時期3月になると3タイプの差は縮まり、何れの領域でもまた、何れの誕生群においても3タイプの有意的な序列はなくなる。さらに99年誕生群06/03では3領域においてCタイプが有意に高くなっている。

表2 時期×領域×年齢×園タイプの分散分析を行った分散分析表

	自由度	F 値	有意確率
被験者内効果の検定			
時期	2	645.01	0.00
		04/06 > 05/03 > 06/03	
時期 × 年齢	2	9.55	0.00
時期 × 園タイプ	4	21.42	0.00
時期 × 年齢 × 園タイプ	4	16.58	0.00
誤差(時期)	1208		
領域	5	96.71	0.00
		E>C>A>D>B, E>C>F>D>B, A≐F	
領域 × 年齢	5	21.64	0.00
領域 × 園タイプ	10	28.79	0.00
領域 × 年齢 × 園タイプ	10	3.12	0.00
誤差(領域)	3020		
時期 × 領域	10	59.01	0.00
時期 × 領域 × 年齢	10	8.61	0.00
時期 × 領域 × 園タイプ	20	1.18	0.26
時期 × 領域 × 年齢 × 園タイプ	20	7.95	0.00
誤差(時期×領域)	6040		
被験者間効果の検定			
年齢	1	154.30	0.00
		99年度誕生群 > 00年度誕生群	
園タイプ	2	34.03	0.00
		A>C>B	
年齢 × 園タイプ	2	12.28	0.00
誤差	604		

表3 領域毎に時期×年齢×園タイプの分散分析を行った分散分析表

	自由度	知的 F 値	運動的 F 値	情緒的 F 値	社会的 F 値	生活習慣 F 値	遊び F 値
被験者内効果の検定							
時期	2	872.43 **	827.61 **	290.25 **	373.23 **	442.33 **	271.45 **
		全ての領域で 06/03 > 05/03 > 04/06					
時期 × 年齢	2	4.67 **	0.17	16.88 **	15.42 **	8.26 **	8.60 **
時期 × 園タイプ	4	13.44 **	19.88 **	15.56 **	19.98 **	14.01 **	13.78 **
時期 × 年齢 × 園タイプ	4	16.62 **	15.41 **	9.60 **	14.70 **	15.98 **	13.54 **
誤差(時期)	1208						
被験者間効果の検定							
年齢	1	169.27 **	148.98 **	111.88 **	96.08 **	151.15 **	87.52 **
		全ての領域で 99年度誕生群 > 00年度誕生群					
園タイプ	2	42.14 **	8.59 **	17.25 **	19.02 **	83.10 **	22.82 **
		A>C>B	A≐C>B	A>C≐B	A>C≐B	A>C≐B	A≐C>B
年齢 × 園タイプ	2	7.32 **	10.76 **	6.92 **	10.03 **	16.92 **	11.88 **
誤差	604						

これらの結果は、さらに00年誕生群のその後の結果との照合が必要であるが、現時点では次のようなことが考えられる。

まず、Aタイプの3歳児3月の評価が高いことについて考えたい。表6の時期効果の検定結果でも明らかのように、Aタイプは3歳児の6月から3月までの上昇が大きい。3歳から4歳の1年間の評価は知的と運動的発達を除いて下降している。これを保育方法との関連で考察すれば、よく保育現場で言われていることであるが、3歳児(年少組)は保育者のやり方次第で表面的に順応し、できているように見えるが、4歳児期(年中組)になり園生活に慣れて、自

表 4 誕生群ごとに時期ごと、領域毎に園タイプを比較した分散分析表（99年度誕生群）

		自由度	F 値	有意確率	群間比較	
06/03	知的	グループ間	2	23.54	0.00	A>B, C>B
		誤差	383			
		合計	385			
06/03	運動	グループ間	2	18.35	0.00	C>A, A>B, C>B
		誤差	383			
		合計	385			
06/03	情緒	グループ間	2	11.10	0.00	A>B, C>B
		誤差	383			
		合計	385			
06/03	社会性	グループ間	2	18.95	0.00	C>A, A>B, C>B
		誤差	383			
		合計	385			
06/03	生活習慣	グループ間	2	28.08	0.00	A>B, C>B
		誤差	383			
		合計	385			
06/03	遊び	グループ間	2	22.34	0.00	C>A, A>B, C>B
		誤差	383			
		合計	385			
05/03	知的	グループ間	2	11.55	0.00	A>C, C>B, A>B
		誤差	383			
		合計	385			
05/03	運動	グループ間	2	4.22	0.02	A>B
		誤差	383			
		合計	385			
05/03	情緒	グループ間	2	2.92	0.05	A>B
		誤差	383			
		合計	385			
05/03	社会性	グループ間	2	7.55	0.00	A>B, A>C
		誤差	383			
		合計	385			
05/03	生活習慣	グループ間	2	12.60	0.00	A>B, A>C
		誤差	383			
		合計	385			
05/03	遊び	グループ間	2	7.07	0.00	A>B, C>B
		誤差	383			
		合計	385			
04/06	知的	グループ間	2	29.17	0.00	A>C, C>B, A>B
		誤差	383			
		合計	385			
04/06	運動	グループ間	2	5.47	0.00	A>B, A>C
		誤差	383			
		合計	385			
04/06	情緒	グループ間	2	14.45	0.00	A>B, A>C
		誤差	383			
		合計	385			
04/06	社会性	グループ間	2	21.25	0.00	A>B, B>C, A>C
		誤差	383			
		合計	385			
04/06	生活習慣	グループ間	2	35.98	0.00	A>B, A>C
		誤差	383			
		合計	385			
04/06	遊び	グループ間	2	14.04	0.00	A>B, A>C
		誤差	383			
		合計	385			

表 5 誕生群ごとに時期ごと、領域毎に園タイプを比較した分散分析表 (00年度誕生群)

			自由度	F 値	有意確率	群間比較
06/03	知的	グループ間	2	3.22	0.04	A>C
		誤差	221			
		合計	223			
06/03	運動	グループ間	2	4.47	0.01	B>A , B>C
		誤差	221			
		合計	223			
06/03	情緒	グループ間	2	1.73	0.18	
		誤差	221			
		合計	223			
06/03	社会性	グループ間	2	10.78	0.00	A>C , B>C
		誤差	221			
		合計	223			
06/03	生活習慣	グループ間	2	15.80	0.00	A>C , B>C
		誤差	221			
		合計	223			
06/03	遊び	グループ間	2	14.25	0.00	A>C , B>C
		誤差	221			
		合計	223			
05/03	知的	グループ間	2	55.51	0.00	A>B , A>C
		誤差	221			
		合計	223			
05/03	運動	グループ間	2	33.40	0.00	A>B , A>C
		誤差	221			
		合計	223			
05/03	情緒	グループ間	2	32.49	0.00	A>B , A>C
		誤差	221			
		合計	223			
05/03	社会性	グループ間	2	30.72	0.00	A>B , A>C
		誤差	221			
		合計	223			
05/03	生活習慣	グループ間	2	75.70	0.00	A>B , A>C
		誤差	221			
		合計	223			
05/03	遊び	グループ間	2	36.74	0.00	A>B , A>C
		誤差	221			
		合計	223			
04/06	知的	グループ間	2	19.49	0.00	A>B , A>C
		誤差	221			
		合計	223			
04/06	運動	グループ間	2	9.02	0.00	A>C , B>C
		誤差	221			
		合計	223			
04/06	情緒	グループ間	2	11.40	0.00	A>C , B>C
		誤差	221			
		合計	223			
04/06	社会性	グループ間	2	10.70	0.00	A>C , B>C
		誤差	221			
		合計	223			
04/06	生活習慣	グループ間	2	60.11	0.00	A>B , A>C
		誤差	221			
		合計	223			
04/06	遊び	グループ間	2	5.60	0.00	A>C
		誤差	221			
		合計	223			

表6 領域毎, 園タイプ毎, 学年毎に時期の効果をT検定した結果

		Aタイプ				Bタイプ				Cタイプ									
		00年度誕生群		99年度誕生群		00年度誕生群		99年度誕生群		00年度誕生群		99年度誕生群							
		t 値	df	t 値	df	t 値	df	t 値	df	t 値	df	t 値	df						
知的	04/06-05/03	22.19	130	**	9.11	152	**	3.81	32	**	8.99	90	**	11.42	59	**	12.60	141	**
	05/03-06/03	0.86	130		11.67	152	**	13.27	32	**	6.02	90	**	13.19	59	**	15.07	141	**
	04/06-06-03	21.49	130	**	21.70	152	**	17.55	32	**	14.64	90	**	21.87	59	**	23.35	141	**
運動的	04/06-05/03	18.84	130	**	11.48	152	**	3.62	32	**	9.59	90	**	13.68	59	**	14.20	141	**
	05/03-06/03	2.21	130	*	9.13	152	**	12.46	32	**	6.07	90	**	12.30	59	**	14.76	141	**
	04/06-06-03	23.66	130	**	21.10	152	**	15.45	32	**	14.38	90	**	17.47	59	**	23.99	141	**
情緒的	04/06-05/03	11.01	130	**	8.61	152	**	2.45	32	*	5.02	90	**	7.84	59	**	7.99	141	**
	05/03-06/03	-3.26	130	**	8.15	152	**	7.27	32	**	4.73	90	**	11.50	59	**	10.79	141	**
	04/06-06-03	10.25	130	**	14.13	152	**	9.41	32	**	8.01	90	**	13.28	59	**	17.70	141	**
社会的	04/06-05/03	11.99	130	**	7.99	152	**	2.95	32	**	4.81	90	**	7.87	59	**	9.37	141	**
	05/03-06/03	-1.81	130	+	7.81	152	**	9.09	32	**	5.97	90	**	9.49	59	**	12.93	141	**
	04/06-06-03	14.01	130	**	13.87	152	**	11.04	32	**	7.82	90	**	12.63	59	**	19.66	141	**
生活	04/06-05/03	11.76	130	**	6.97	152	**	2.37	32	*	6.88	90	**	8.57	59	**	7.66	141	**
	05/03-06/03	-1.77	130	+	11.39	152	**	10.05	32	**	4.46	90	**	9.62	59	**	11.90	141	**
	04/06-06-03	12.59	130	**	17.34	152	**	11.08	32	**	8.81	90	**	15.72	59	**	21.51	141	**
遊び	04/06-05/03	12.90	130	**	5.89	152	**	1.92	32	+	3.05	90	**	6.91	59	**	8.01	141	**
	05/03-06/03	-1.13	130		4.99	152	**	10.39	32	**	4.21	90	**	8.37	59	**	11.51	141	**
	04/06-06-03	14.35	130	**	10.10	152	**	8.50	32	**	9.60	90	**	11.50	59	**	18.18	141	**

己主張をし、自分を自由に表現するようになると、一度できたようなことが崩れてくる。むしろ本来の自分を出してきたことを本当の子どもの育ちの姿と見られる、いうように解釈すればこの時期の評価が過大評価、又は一過性の子どもの姿ではないかとの解釈ができる。これは99年度群06/03と00年度群/03の4歳児期のAタイプ評価がほぼ一致していることから伺えることである。

次に、Cタイプは4歳児6月では何れの領域においてもAタイプより低かったが5歳児3月ではで運動、社会、遊び3領域において最も高く、他の3領域についてもBタイプより高く、Aタイプとの差はない(表4) ことについて考えたい。図1及び表6の時期効果の検定から、Cタイプは他の2タイプと比較して上昇の角度が一樣である傾向がみられる。発達のテンポが安定していることによって一貫して発達していることの成果と見なすことができるかどうか、今後さらに詳しい検討が必要である。

2 初期の達成率差とその後の発達傾向と園タイプとの関連

各園タイプ別、領域別、対象群別に達成率群による変化の様子を示したものが図2である。ここから、傾向として次のことが伺える。

何れの園タイプにおいても上位、中位、下位のグループは逆転することはないが、園タイプによって各グループ間の差異に違いがみられる。Aタイプにおいては当初の差が減少し、全体が同じ水準に近づく。特に下位グループと中位グループの差がほとんどなくなる。Bタイプは変動が大きいが、中位グループと下位グループとの差がなくなる傾向はみられる。Aタイプと異なり、上位群の5歳児期での伸びが目立っている。Cタイプは他の2タイプと異なり、4歳児末では3群が近づくが5歳児期では下位群の遅れが目立っている。

以上のような園タイプによる個人差の変化は、今回の結果のみで結論づけることは早計であろう。しかし、こうした傾向が実態であるとするれば、保育の進行過程において留意すべき点についての些かの示唆が含まれていると考えることができる。

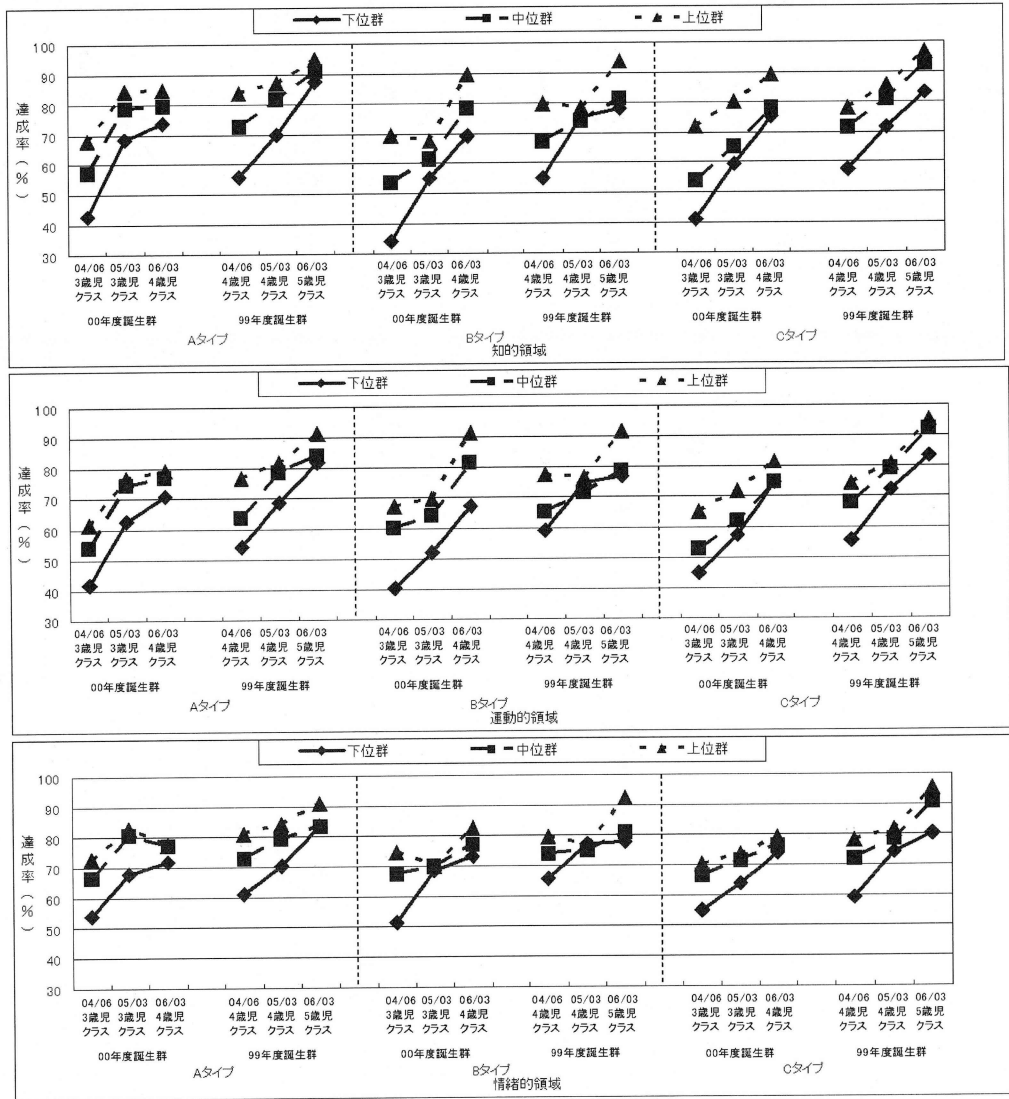


図2-1 各園タイプ別，領域別，対象群別に達成率群による変化
(知的，運動的，情緒的)

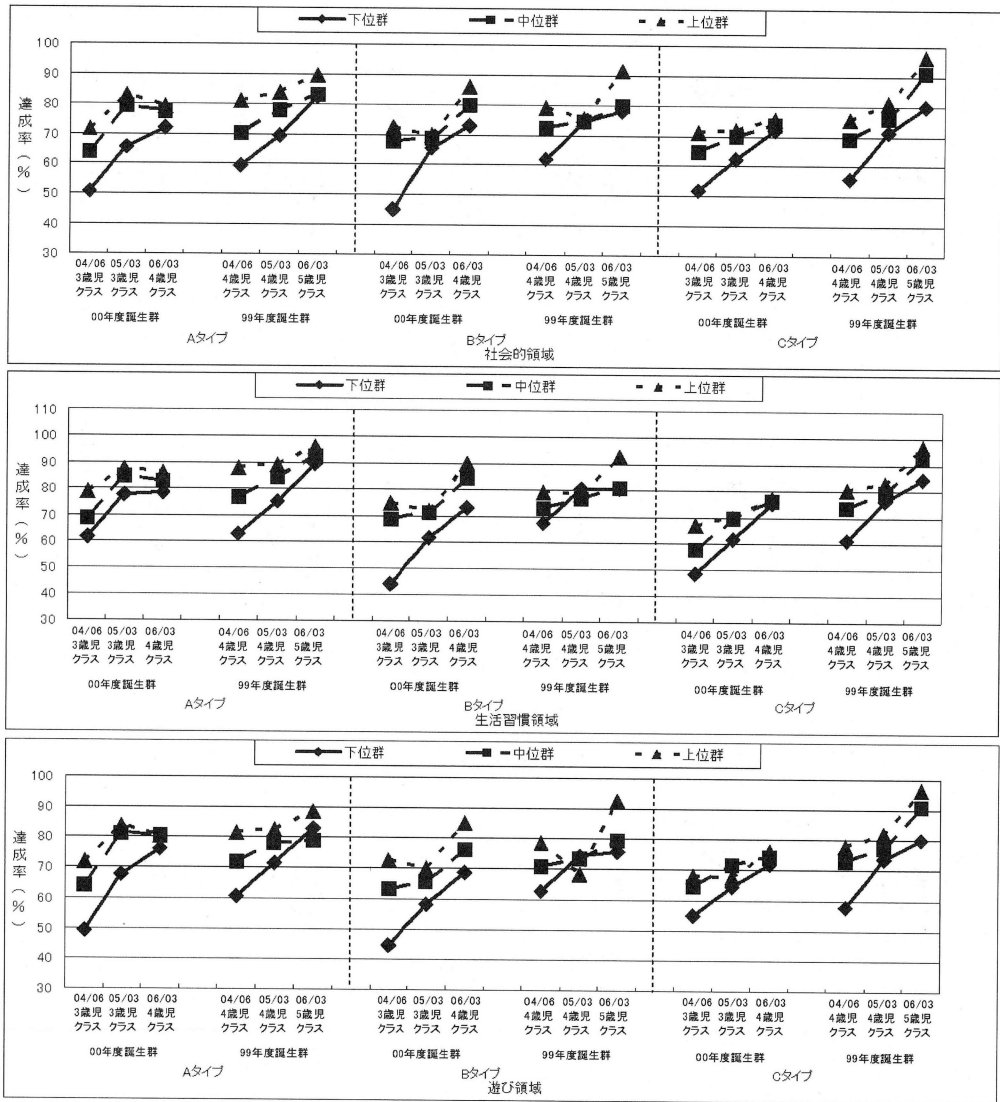


図2-2 各園タイプ別，領域別，対象群別に達成率群による変化
(社会的，生活習慣，遊び)

まとめ

今回の縦断的調査結果から、園タイプによる達成率評価の違いを新たな側面で捉えることができた。すなわち、どのような経験、経過の上に立つ今の状態か、との視点で調査結果の到達率を見直すことによつて、すなわち発達の道筋が違っていると見ることによつて、保育のあり方により関連づけてこの調査結果を考えることができる。

それぞれの保育実践は、地域性や子どもの実情に応じて作成された園独自の教育計画によつて展開されており、その教育的基盤の上で子どもの発達がなされていく。また、今の幼児教育は「心身諸側面の相互関連による、多様な経過をたどる発達」「個人の特性に応じた保育」が基本とされており、発達の経過は様々であることが前提とされている。今回の結果において保育スタイルによつて発達の経過が異なる傾向が伺えたのは当然と言え、幼稚園教育要領のねらいは「幼稚園修了までに達成することが望ましい」ねらいであり、さらに子どもの成長はその後も続くものであるから、一つ一つの時点で達成率はあくまでも「経過」として考えておくことが重要であるとする。しかし、今回示された園スタイルによる発達経過の違いは、無理の無い、円滑な発達を促すための保育のあり方にかかわる示唆を含むものとして、さらに検証を進める予定である。

個々の子どもの具体的な発達経過の検討、指導計画や子どもの具体的な経験活動と行動発達との関連、子どもを見るときの評価軸、評価の信頼性の検討なども今後の課題としていきたい。

引用・参考文献

- 関口はつ江 長田瑞恵 野口隆子 (2005) 幼稚園における保育方法と保育者による発達評価の関連 (1)
十文字学園女子大学人間生活学部紀要第3巻 1-13
- 関口はつ江 長田瑞恵 野口隆子 (2006) 幼稚園における保育方法と保育者による発達評価の関連 (2)
十文字学園女子大学人間生活学部紀要第4巻 55-67
- 岸井勇雄編著 (1994) 保育実践の研究 チャイルド本社
- 無藤隆・やまだようこ (1995) 生涯発達心理学とは何か—理論と方法— 金子書房
- 吉村真理子著 (1999) 3歳児の保育 ミネルヴァ書房
- 文部科学省 (1998) 幼稚園教育要領
- 厚生労働省 (1999) 保育所保育指針